

IV-7

沿道建築物に起因する街路イメージ研究の系譜

東北大学 学生員 ○齊藤 淳  
 東北大学 正 員 平野勝也  
 東北大学 F会員 稲村 肇

1. はじめに

街路イメージ研究は、現在まで様々な分野、手法によって数多く行われてきた。しかしながら、未だ定説を得るに至っていない。そこで、今までの街路イメージ研究を幾つかのグループに系譜として意味づけ、今後の街路イメージ研究がどういった方向に向かうべきかを見つける必要がある。

北原<sup>1)</sup>や篠原<sup>2)</sup>の報告は広い観点で都市景観を扱い、「街路イメージ」、「街路景観」という扱われ方がされない。これらは都市景観の一つとして議論が進められているので、今後の街路イメージ研究を発展させるには不十分であると考えられる。

そこで本稿は、街路イメージ研究の中でも沿道建築物に起因する研究にのみ着目し、これらを幾つかのグループで整理し系譜としてまとめることを目的とする。

2. 対象文献

本稿では「街路イメージ研究」、「視覚現象」、「沿道建築物起因によるイメージ研究」、「日本の一般的街路」を取り扱っている研究を対象を絞り、表-1の通り5論文集・年代から収集した計49本を対象文献とする。

表-1 対象文献

対象学会	対象年度	本数
① 日本建築学会(計画系)論文報告集	1949~1997	22本
② 日本都市計画学会学術研究論文集	1966~1997	22本
③ 土木学会論文報告集	1958~1997	1本
④ 土木計画学研究・論文集	1984~1997	4本
⑤ 造園雑誌(ランドスケープ研究)	1954~1997	0本

3. 分類方法

街路イメージ研究とは、ある対象景観から生まれるイメージと、その形成要因を明らかにする事である。従って、そのイメージ形成要因の捉え方の差に、最も顕著な各研究の特徴が表れていると考えられる。よって本稿では、その捉え方の違いにより対象文献を2つの側面から分類した。

具体的には、各研究が取り扱っているイメージ形成要因の抽象度と網羅度に依った。抽象度は看板率などの「具体的」なもの、乱雑さなどの「抽象的」なものという2分類とした。網羅度に関しては、網羅的に「全構成要素を対象」とするものと「個別を対象」とするもので分類した。

4. 時代区分の設定

上述の分類方法に従い対象文献を年表としてまとめた結果が図-1である。この年表から見て取れるように、街路イメージ研究には、イメージ形成要因の捉え方の違いから4つの時代区分が存在する。

- I. 具体的個別的時代 (1960~1970年代始め)
- II. 具体的網羅的時代 (1970年代始め~1983年頃)
- III. 具体的個別的・抽象的網羅的時代 (1983年頃~1992年頃)
- IV. 抽象的個別的時代 (1992年頃~現在)

5. 系譜の考察

(1) I. 具体的個別的時代

研究群1(図-1)は個別の店舗に着目した研究群である。例えば、小林ら<sup>1)</sup>は洋装店店舗のイメージ調査として、店舗ファサードデザインの好みについて形容詞対を用いながら双対比較法により解析し、各店舗のファサードデザインに順位付けをした。

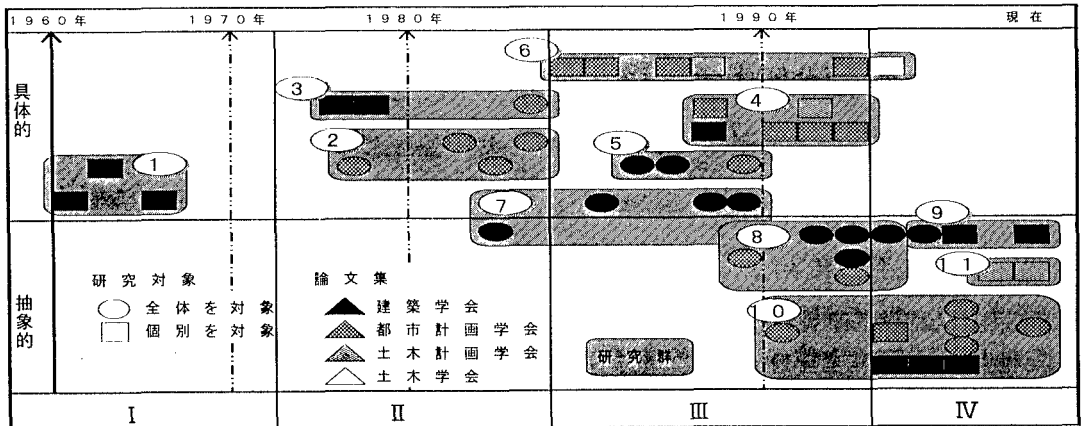


図-1 年表

## (2) II. 具体的網羅的時代

時代 I においては個別店舗の分析に過ぎなかった。この時代から「街路」について言及し始めているので、いわば街路イメージ研究の草創期と言える。研究群 2 (図-1) は、確認できるだけの全構成要素を手当たり次第選出し、一つ一つ詳細に調べていけば街路としての評価が可能になるとし、例えば北村<sup>2)</sup> は街路のイメージ評価を SD 分析によって把握し、その評価と景観構成要素との関係を明らかにした。この結果、街路評価の際に重要となる構成要素を導き出した。

一方、志水<sup>3)</sup> は街路店舗の業種に着目し、この業種が街路イメージに対してどう影響力を持つかについて考察している。この研究は研究群 3 (図-1) に属し、構成要素の物理的状態ではなく、業種という「意味」が形成するイメージを追求しているという点で、この研究群は特殊であると言える。

## (3) III. 具体的個別的・抽象的網羅的時代

研究群 2 では、導き出した景観構成要素がある程度有効であることが確かめられたのだが、これらは現象論であって因果律の解明、つまりイメージ形成要因の特定には至らなかった。そこで、研究が様々な方向に展開したのがこの時代である。

研究群 2 での有効性を基にした研究群 4, 5 (図-1) では、分析手法・分析対象を変化させることを試みる。研究群 4 では対象を昼夜間・陰影といった光による景観構成要素の変化とし、山下<sup>6)</sup> は SD 分析により夜間における街路空間の快適性評価の特徴を、昼間と比較しながら把握した。研究群 5 において船越<sup>4)</sup> は、コンピュータ画像を用いて街路空間を数値的表現が可能な景観構成要素に分解して、多変量で各街路イメージを明らかにした。

また研究群 2 の限界から、イメージ形成要因が何であるかを求めるために研究群 6, 7, 8 (図-1) が展開した。研究群 6 では、イメージ形成要因と考えられるある支配的な景観構成要素にのみ着目し、より深い分析を加えている。茅野ら<sup>5)</sup> は街路の看板率と最大開口率の変化パターンにより街路景観を 6 つに類型化した。研究群 7 は奥による一連の研究であり、第 1 報<sup>7)</sup> で街路の瞬間視実験を行い、その視覚特性に基づいた景観構成要素の抽出と分類をし景観上の特性を検討した。この研究群は認知科学を取り込み、その結果を基に研究を展開させるという点で優れている。研究群 8 は、人は知覚した情報があるまとまりとして抽象的に認識しているとし、この情報こそが街路イメージを決定づけているとしたものである。この研究群では、CG を用いて景観全体を抽象的に整然・乱雑性、揺らぎといった指標で捉える試みがなされる。例えば伊藤ら<sup>8)</sup> は、街

路の水平方向と垂直方向線分に着目し、その量の違いから街路を 5 つに類型化した。

## (4) IV. 抽象的個別的時代

この時代では、研究群 4, 5, 6 の延長にあたる研究の報告がなく、研究群 8 のようにイメージ決定要因を抽象的に捉えた研究が主流となる。研究群 9 (図-1) では、安藤ら<sup>9)</sup> が SD 分析の結果から得た主要な景観構成要素を CG により簡略化し、構成要素グラフィックスとして彩色し、その違いから街路イメージを説明した。また研究群 10 (図-1) では稲垣<sup>10)</sup> が都市の色彩として、建築の外部色彩と広告塔の色彩にのみ着目し、模型実験によってこれらとイメージとの関係を明らかにした。

しかし、この時代においても街路イメージを規定しているのが何であるかの定説には至っていない。

## 5. 今後の展望

このような研究系譜を概観すると、今までの街路イメージ研究には、認識過程をふまえたものが少ない。つまり、認識過程において人が何かを認識する際に、それらにある意味を持たせて認識していることを踏まえた研究が今後必要と考えられ、一部では既にこの種の研究<sup>11)</sup> に取り組んでいる。

## 参考文献

- 1) 北原理雄, 「住環境と環境」をテーマとした研究の動向に関する考察-1975~1988-, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 481-486, 1989
- 2) 篠原修, 景観研究の系譜と展望-風致工学から景観設計へ, 土木学会論文集, No.470/IV-20, pp. 35-45, 1993
- 引用文献
- 1) 小林輝一郎, 鈴木一元: 店舗デザインの持つムード感についての解析-洋装店々舗のイメージ調査を焦点として-, 日本建築学会関東支部第 2 8 回学術研究発表会, pp. 193-196, 1960
- 2) 北村眞一: 街路の景観構成に関する基礎的研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 169-174, 1976
- 3) 志水英樹, 福井通: 中心地区空間におけるイメージの構造 (その 2), 日本建築学会論文報告集, No. 236 pp. 49-59, 1975
- 4) 船越徹, 積田洋: 街路空間における空間構成要素の分析 (物理量分析)-街路空間の研究 (その 2)-, 日本建築学会計画系論文集, No. 364 pp. 102-111, 1986
- 5) 茅野耕治, 後藤春彦: 商業・業務集積地における街路景観に関する研究-看板率と最大開口率を目標とした街路の類型化-, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 211-216, 1984
- 6) 山下菜: 夜間の公共空間の快適性評価実験について, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 445-450, 1988
- 7) 奥俊信: 瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析-街路景観の視覚特性ならびに心理的效果に関する実験的研究 第 1 報, 日本建築学会論文報告集, No. 321 pp. 117-124, 1982
- 8) 伊藤恭行, 近藤裕幸, 飯塚拓生: 街路景観の水平・垂直性に関する研究-コンピュータ画像処理による都市景観の研究 その 1-, 日本建築学会計画系論文集, No. 441 pp. 103-113, 1992
- 9) 安藤直見, 茶谷正洋, 八木幸二, 橋本浩子: 構成要素グラフィックスを用いた街路空間のイメージ分析-街路空間のイメージ分布に関する研究 その 1-, 日本建築学会計画系論文集, No. 476 pp. 135-144, 1995
- 10) 稲垣卓造: 景観整備を目的とした都市の色彩評価に関する実験的研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 451 pp. 29-39, 1993
- 11) 福井恒明, 篠原修, 平野勝也: 商品情報伝達形式からみた商業地の街並みの景観特性, 土木計画学研究・論文集, No. 13 pp. 461-468, 1996